法、道教医学、および実際の医学が一つの場を共有していたことが、つい一〇〇年前位にもあったことを知ることができる。

三、結　論

韓国の代表的医書三種と、民間療法袖珍書のなかから道教医学の背景について考えた。道教、ひいては道教医学が、強く、長く影響したことがわかる。これらの点につき、さらに研究をすすめるつもりである。

（順天堂大学産婦人科）

2　小野蘭山・蕙畝の日記にみる医学館の本草講書と薬品会

遠藤正治

前回は、小野蘭山とその後継者小野蕙畝の日記によって、医学館におけるかくれた業績として薬園の経営があることを紹介した。今回は、同じく『蘭山先生日記』と『蕙畝日記』から医学館における本草講書と薬品会に関するいくつかの事績を跡づけることができたのでこれを紹介することにする。

一、蘭山と本草講書

蘭山は、京都から出府した四日後の寛政十一年四月二日、若年寄掘田正敦から医学館での講書を命ぜられた。以来、死の前年の文化六年に至るまでの十一年間、六次にわたる諸国採薬の期間と医学館が焼失した文化三年を除いて、本草講書に携わり、毎年十二月、その褒賞として銀七

枚を受けている。『蘭山先生日記』の本草講書に関連した事項を見ると次のようである。

寛政十一年四月二日　多紀氏及千田玄知両所被出於館講書可仕旨津守殿仰之由被申達、

寛政十二年十二月廿五日　医学館講書に付、白銀七枚拝受、

享和元年十一月九日　一昨年より之綱目今日満会、

享和三年三月十二日　例刻向大手前今日造醸類終、

享和三年三月十三日　御堂の会今日湿艸下畢、

享和三年三月十四日　啓蒙献上之願今日相済、

文化三年三月四日　（医学館焼失）

文化四年五月廿八日　午半刻より向于大手前今日本艸綱目会読一周終、

文化四年六月十五日　医学館開会也、拙者は十八日より発会也、

文化六年三月廿八日　例刻会読、本艸二周今日満会、依之五会休息従来月十三日可始爾雅会、

医学館における講書または会読は、躋寿館の百日授業以来、儒学の六経に習って、本草、霊枢、素問、難経、傷寒論、金匱要略の六部を中心に行われていた。幕府移管直後、田村西湖によって行われた『本草綱目』の講書は、三八の日の日割が当てられていた。

蘭山の場合も、ほぼこれを踏襲して三八の日、月六回の割合で講書をしていたようである。講書の最初の一周は享和元年十一月に満会としているから、約二年半を要したことがわかる。この第一周の講書が終ってから『本草綱目啓蒙』が出版されている。この状況を考えると、この講義録がもとになった『啓蒙』がなぜ『本草綱目』に無い和産動植鉱物を入れなかったのかの理由が理解できる。なお、『啓蒙』は、はじめ『訳説』と称していたことがわかった。

第二周は会読を行ったようで、医学館の焼失の影響もあってか、文化六年三月満会とすれば、七年の歳月をかけたことになる。

蘭山の本草会読は「大手前」つまり若年寄堀田正敦の屋敷においても行われ、また、医学館構内にあった自宅、つまり江戸の衆芳軒でも行われていた。

二、蕙畝と本草講書

蕙畝は、蘭山没後の文化七年四月二十三日『本草綱目』

水部の講書を始めて以来、死の前年の嘉永四年まで、『綱目』のほか『救荒本草』『救荒野譜』を三八あるいは四九の日に講義し続けた。陪臣町医に来聴を許した天保十四年以後も同様の日割であった。江馬春齢や井口栄達の本草講書は蕙畝のと平行して行われたものであった。

三、医学館の薬品会

蘭山と蕙畝は医学館薬品会の再興と発展の大きな支えとなったことが『日記』から窺える。これまで空白であった天保から嘉永期の開催日や規模も『日記』によって埋められた。

（岐阜県立大垣工業高校定時制）

3　曲直瀬玄朔『食性能毒』における『本草綱目』の取捨

○加藤伊都子・真柳　誠

江戸期の食物本草は少くないが、刊本となり普及した嚆矢は曲直瀬道三・玄朔による『日用食性』である。本書は古活字版やその一六三一年重刊本をはじめ、一七一二年までに計一一版本の存在が確認されており、本書が江戸期の食物本草に占める位置は大きい。

一方、玄朔は渡来したばかりの『本草綱目』を即座に利用し、一六〇八年に『薬性能毒』を著している。当時、最新中国医学の受容と日本化が進む中、食物本草もその例外ではなかった。『日用食性』の一部である玄朔の『食性能毒』も、収載品の項目分類や配列順まで『綱目』を底本としている。そこで『食性能毒』と『綱目』を比較検討し、中国本草学の受容と玄朔の編纂視点を考察することにし